

ハルシナイから上流の地名②

安政五年(一八五八年)、松浦武四郎は、上川から十勝への山越えのために、三月二日(陽曆四月十五日)にカムイコタンを徒歩で通過した。**掲載地図**のハルシナイを通過して、ペンケアソナイ(Penke-as-o-nay 川上の・柴

明治十九年六月二十四日に、樺戸集治監の囚徒によって竣工した上川仮新道(国道十二号の前身)はこのアイヌの人たちが利用した山道を活用した道路であった。

明治二十一年九月二十二日、上川巡察の第二代北海道長官の永山武四郎一行は、この山道を通り上川に赴いた。同行した北海道毎日新聞記者の野中掬泉は、次のように報告した。

「字春志内(ニ至ル。河流アリ、石狩川ニ合スル所、丸木舟ニ三ヲ繋ケリ。岸頭ニ草小屋アリ。(中略)字波武計會曾内、及び、辺武計安曾内ヲ過ギ、石狩川ヲ辞シテ、山ノ平間ニ通セル羊腸タル小径ヲ登ル。山頂ニ程標アリ、「距空知川十一里」ト書ス。此山嶺中腹ヨリ以上樅松繁茂シ、楓葉其間ニ散点ス。風致甚佳。山径ヲ下リ、字達摩似ニ至ル。既ニシテ坂路アリ、之ヲ下ル。右ノ方ヲ見レバ、十勝ノ連山樹林ノ間ニ隱見ス。字伊野ニ至ル」(註)この項は、新聞マイクロ欠号のため、明治三十五年刊行の林頭三『北海誌料』からの転載)

右の新聞記事の「達摩似」は、**掲載地図**のラルマニウシナイ(Rarmani-us-nay オンコロイチイの木・群生する・沢)の和人訛である。なお、当連載⑨で、

右の上川仮新道の山道と、松浦武四郎が通った通路が同一としたが、パンケアソナイ経由は同一であるが、ルートは別であるので、訂正させていただく。明治二十二年に、再び樺戸集治監の囚徒の労役によって、上川仮新道の改修工事が行われた。**掲載地図**の旧国道十二号が石狩川沿いに難工事の末に開削されたのである。アイヌ古道とは全く別の道路が作られたのである。

平成三年十月三日、**掲載地図**の「春志内トンネル」(一八〇五)が開通する。旧国道十二号の石狩川沿いの道路は、「春志内の大曲り」と言われた交通上の難所であり、また、石狩川の増水による国道の冠水、崖崩れなどが頻発した。こ

のため旭川開発建設部が、防災対策として、昭和五十九年から工事に着手していたものである。国道十二号が、最初にはアイヌ古道に付けられ、次は石狩川沿いの道になり、最後は春志内トンネルとなるという歴史が展開されたのである。

前回紹介したように、「ハルシナイ」という、由緒あるアイヌ語地名が、明治二十四年の永田方正の『北海道蝦夷語地名解』によって、「春志内トアルハ、上川アイヌノ辞ニアラス」として、「アルウシユナイ」にされ、明治三十年の『北海道仮製五万分一図』からは、「アルウシユナイ」と記された。さらに、昭和になつて、公式河川名は「神居第四線川」という味気のない番号川になつてしまった。



しかし、**掲載地図**に見えるように、ハルシナイのアイヌ語河川名の上部に、字名として「春志内」が残り、ラルマニウシナイの右に、「(神居町字)春志内」の字名も記され、それに加えて、新たに「春志内トンネル」として、歴史的地名のハルシナイの名前が残されたのは、幸いであった。

(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語地名研究

92

高橋 基